

## 中世鎌倉における「柿経」をめぐる諸問題 ―建長寺出土柿経を中心として

鈴木絵美（文化財課会計年度職員）

### はじめに

筆者は建長寺出土の「柿経」の再整理作業に携わる機会を得た。そこで本資料の貴重性を再確認し、その意義について見直すきっかけになればと思い、本稿を起こすことに至った。

本稿では、再整理するにあたって、「柿経」の表記の中に確認できた經典の“番付”とみられる数字の記述がみられるものや經典名の記されたものについて抽出を行った。そこから見えてくる中世鎌倉における柿経をめぐる諸問題について、すでに指摘される論点などを整理しながら、それらを踏まえた上で、建長寺出土の柿経の意義について若干ながら検討を加えながら、今後の研究の視座としていきたい。

### 1. 建長寺―「柿経」が出土したのは……

今回、扱う資料が出土した調査地は、臨済宗建長寺派の大本山建長寺の旧境内に含まれる。建長寺は正式には巨福山建長興国禅寺といい、開山第一世は宋の僧蘭溪道隆、開基は北条時頼というのは有名であるが、創建年代については諸説あり、『吾妻鏡』などの記述から、建長三年(1251)とする説と聖一国師円爾の年譜などによって、建長元年(1249)とする説がある(註 1)。建長寺には絵図が残されており、往時から続く塔頭の隆盛ぶりが伺い知れる。本資料はその絵図にも描かれている玉雲庵と見られる場所から出土している。

その調査の概略について触れておくと、平成 5 年 2 月から同年 6 月にかけて建長寺旧境内(現鎌倉学園・体育館用地)の発掘調査が行われ、蔵骨器や火葬骨とともに大量の「柿経」が出土した。伴って出土した天目茶碗(註 2)にも「玉雲」の墨書がみられることからその跡であることが推定される(註 3)。当時の検出状況などについて「土壌に柿経一束が完全な状況で埋納された状況は確認されておらず、乱雑な状況ではほかの遺物と共に投げ込まれ埋没した状況」が推察される(註 4)。ただ報告書が未刊であるためにそれ以上は推測の域を出ない。

### 2. 「柿経」とは……

「柿経」についても簡単にその概要について触れておきたい。「柿経」は一枚の板を薄く削り出し(以下柿板と呼ぶ)、一端、もしくは両端を圭頭状に整形した木製の板に写経したものを総称して用いられる(以下柿経とする)。その写経方法は、柿板 20 枚を一単位-「一把」とし(以下一把とする)、柿板を 20 枚扇状に並べていき、片面の右側から左側へ經典の中の 1 行目から 20 行目までを写経し、これを裏返して、また 21 行目から 40 行目までを同様にして写経していくものである(全国的には両面ではなく、片面のみの写経

の例もみられる)。本資料ではその痕跡は見られなかったものの、全国的には柿経を渦巻状に束ね、竹の籬などで締められていた例も見受けられる。古くは平安時代末から、鎌倉・室町期と中世を通じて制作されており、江戸時代中期ごろまで追善供養などの際に使用されたとみられる。それは「写経」の功德と「造塔」の功德を合わせて行うことで、二つの作善により極楽浄土を願うためのものであった。

### 3. 建長寺出土の柿経の「番付」

#### 建長寺出土柿経の特徴と「番付」研究の可能性

建長寺出土柿経を概観すると、長さが25.0 cm前後、幅は1~1.2 cmのものが多く、材質については鑑定されていないため、断定はできないものの、おそらく数種類の材質の木材が用いられていると考えている。またその厚みについては0.5 cmほどのしっかりとした厚みを持つものと『柿』と呼ぶのにふさわしいごく薄いものも見られ、それらは大抵一群を成している。この差は時期によるものなのかどうかは判然としないが、複数回行われたであろう柿経埋納の都度ごとに調達された材量の質の差があったと考えられる。

今回取り上げた柿経に記された「番付」は柿経の墨書の中でも、経典の一把の冒頭1枚目に付す番号とみられ(以下番付とする)、本資料の中にも『法華経』の巻数や経典の経題の後に番号が付されたものが多くみられる。これは「一把ごとに書写した柿経を『一束』に束ねる際、順番が狂わないように何把目に当たるのかを示すべく付されたもの」(註5)と考えられる。表1に示した通り、その表記にも様々なパターンがみられ、「妙法蓮華経法師品 第十」のように経題のあとにその巻数や把数が記され「二之七」のように数字で経典の巻数と把数を羅列する場合も多く見られる。その数字の羅列だけにしても、例えば「二之七」「二ノ七」「第二ノ七」のように同じものでも多数のバリエーションが存在することが分かる。これは書写した者による差異なのか、または時期差によるものなのかは判然としない。

ただ、番付のある程度まとまって見つかった一群の中でその番付を観察することで、一把の構成や写経形態などが推察できるとすでに指摘されているように(註6)、この番付の表記の仕方一つにしても柿経が「誰によって」「どのようにして」写経がなされたのかを知る手がかりの一つになるということである。

では具体的に、建長寺出土柿経に記された経文や番付から何が分かっているのか整理しつつ見ていきたい。

#### 3-1. 建長寺出土の柿経の経文・「番付」からわかること その①

一人の書き手によって書かれているか。(写真1・表1)

まず柿経を概観し全体を通じて分かることは、それぞれ筆跡が異なり、何人もの書き手によって写経がなされていることである。筆者らが行った再整理の過程にもそれは顕著に確認できるほどであった。巧拙や書き手による「クセ」がそれぞれ違うため、科学的な分析を加えなくても、筆跡による分析はある程度

は可能と考えられる。ただやはりそれを裏付けるような根拠が必要になる。その裏付けとなると考えられるのが、資料から読み取れる写経形態の違いである。これは前述の報告に抛りすでに指摘がなされている。

まず柿経は確認された經典のうち『法華経』が大半を占めており、巻一～巻八までほぼすべての行が確認されている。一行が「17文字」と「15文字」の異なった写経形態による柿経が確認されることから複数の「束」の存在が想定される(註7)。

また同報告では『法華経』八巻と『般若心経』・『阿弥陀経』の組み合わせ(「十二部経」と呼ばれる)が用いられる際に、経文の行数の異同やその連続性から写経形態の違いが認められるという。さらに表裏の書写された經典の行数の違いなどから一人の書き手が經典の中でどの部分までを書写するのか、「分配」「分者」についての推測がなされている(註8)。

併せて経文の中で使用される文字—漢字にはいく通りもの異体字が存在し、書き手によって、またはその時期によってどの字体を選択するのか、ある程度共通性がみられることから、写経形態の違い、すなわち書き手の人数の特定にもつながるものとみられる。

さらに今回抽出した番付も、経文の内容自体の記述と番付の記述にはその字体に差異が認められるため、実際に経文を書写した人物と番付を記した人物は異なる可能性がある。これは先に触れた「分配」や「分者」に携わる役が存在した可能性が考えられ、柿経の使用された状況の一端を示すといえるのではないだろうか。

ただいづれにしても「一把」「一束」の復元はなされていないため、書き手の人数や分配について未だ不明な点が多く、經典の連続性や筆跡などの更なる詳細な分析を併用することで、凡そ何人の書き手によって、どういった分配方法がなされ、書写されたものであるのか、その具体像を探ることが今後の課題といえる。

### 3-2. 建長寺出土の柿経の経文・「番付」からわかること その② —いつ制作されたのか。

前出報告では柿経の中に「貞治七年正月廿五日」と記されたものがあることから柿経が書写された実年代とはしつつも、「束」の復元や数万点に及ぶ資料を1点の銘のみからその年代と判断することは難しいとしている。また柿経に伴った出土品である木製五輪塔形分骨器<sup>(1368)</sup>には「元徳二年」(1330)の墨書が存在し、この両者には40年近い時間差がある。その時間差について、同報告では「相当乱雑な状況でほかの遺物とともに投げ込まれたような検出状況と併せ、貞治七年～元徳二年頃に柿経の写経が行われ、どこかに奉納・安置されていたものが何らかの理由で蔵骨器などと共にかなり廃棄に近い状況で土壌に埋納されたのではないかと推測され、その年代を14世紀末ごろとしている(以上註9)。このことを勘案すると、建長寺出土柿経は本来の写経後に埋納された時期というよりも、写経後しばらく期間を経ての二次的な投棄と見られる。柿経が埋納された後、柿経がどのような経緯をたどるのか断定はできないが、本来的な意味での

埋納とは言えない状況が見て取れる。

検出状況については報告書も未刊であるため、これ以上推測は困難ではあるが、伴って出土した遺物についての詳細な分析を加えることは可能であり、これも今度の課題としておきたい。

#### 4. 仏法寺出土柿経からみえること —材料はどこからきたのか— 中世鎌倉の都市の発展とともに

一方、建長寺で柿経が出土して以降、鎌倉で確認され注目されたのが仏法寺跡出土の柿経である(写真2)。仏法寺跡で検出された池の最下部粘土層、中部灰色粘土層からまとまった量の柿経が出土している(註10)。当資料は建長寺のものとは異なり、片面のみ写経がなされており、概観すると「法華経」が主に書写されているようである。

時代は、出土した他の遺物の年代観と併せて、最下層出土が13世紀後半ころ、その上層から見つかったものが14世紀末～15世紀初頭以前とされている。その時期による遺物の個体差については最下層出土のもの遺存状態が悪く、未詳ではある。ただその出土状況から、火葬骨などと共に池底から検出されており、この柿経を用いて何らかの儀式が行われた際に本来的な意味での埋納とみることができる。それらの共伴遺物や柿経自体の写経形態等についての更なる詳細な分析により柿経を用いた埋納についての具体像に近づく上でも貴重な資料の一つと考えられる。

さらに仏法寺跡出土の柿経について特に注目されるのは、柿経の使用木材の樹種構成についての分析がなされていることである(註10)。

分析によると、柿経はヒノキとサワラという2種類の材が用いられたことが分かっている。一方で周辺の花粉分析の結果と併せて同報告では、「木材利用と周辺植生との不一致が認められる」としている。これは、もともとは13世紀後半を境にしてアカガシ亜属・スギが優占する植生からマツ属複維管束亜属(ニョウマツ類)が優占する植生への明瞭な交代がみられ、それには鎌倉の土地改変に伴う都市開発や人口の増加等による木材の利用がその要因となったことが推測されている(註11)ことから、近隣の木材を調達しやすい環境はスギが主体であったのにも関わらず、当遺跡出土柿経ではヒノキやサハラといった木材が選択されているということになる。報告中では鎌倉の遺跡から出土する生活に関わる道具や建築に関わる資材などはスギが多用されており、これは手に入れやすく比較的安価であった可能性と、それとは対照的に罪過の滅罪と極楽浄土への往生祈願のための特別性を意図しての高価な材を選択したという2点の要因があった可能性が指摘されているが、これは鎌倉においてだけであるのか、もしくは中世を通じて認められることであるのか、その普遍性については資料の増加が待たれるところである。

鎌倉の都市としての繁栄に伴う人口増加による需要の爆発的な増加は木材利用にも顕著に表れたと考えられているが、これはむしろ木材に関わらず、開発に伴う資源の調達全般に関りうることであり、ほかにも同様にして流通や都市鎌倉を取り巻く環境面などの各方面に波及した可能性のある問題の中の一つ

として捉えられそうである。

仏法寺跡出土柿経に書写された経典の内容やその写経形態の分析という点においては、未だ詳細は不明な点が多く、検討の余地が多く残されている。

## 5. 柿経が使用される「場」の具体像にむけて

実際に柿経が使用された「場」の具体—特にその願主や結縁者・制作した者などについては、柿経が入っていた容器の奥書や柿経自体への記述などがなければ明らかとはならない。ただ柿経の経文の観察により、新たにその一端が見えてきた事例もある。

建長寺出土資料においても、経文の観察により字体の違いなどから複数人の書き手によって書写されたことは述べてきたが、経文の書き間違い、誤字なども散見される。その際にそれを塗りつぶして横に書き直すものやそのまま記載のものなど種々確認できる。これは鎌倉以外でも見受けられるようで、特に近年の調査から、京都市富ノ森城跡出土の柿経では写経後に誤字を訂正した人物の字体が違うことから、内容をチェックする「校正役」の存在が指摘されている(註12)。

柿経の使用された「場」において、単に経文を書写する者だけではなく、先に触れたように経文の番付を記入する役割や、正しく書写できているかを確認する校正役が存在するなど、柿経を書写する段階では分担や役割が発生していた可能性が考えられ、その具体像に迫る上でも興味深い指摘である。

また柿経が書写された経緯について手掛かりとなるのが経文以外の記述である。経文以外の記述としては、先に挙げた番付、年号、経題の他に人名と見られる記述や法華経以外の光明真言などの真言がある。今回提示した表1の中でもいくつか見受けられる。「○軍已番得阿」や「○○法師 第一」「聖順禪尼」(註13)などはおそらく人名であるとみられ、こうした人名と見られる記述から、それがどういった立場の人物であったのか考察が進むことで、柿経が埋納された経緯について近づけると考える。

### 展望 —

柿経研究では使用される「場」の具体像に迫ることがまずはその最たる課題といえると思うが、いつ、どういった場で、どういった人によって、どのように納められたのか、直接的な記述がある例はまれであり、明白にそれらが分かっている事例は少ないといえる。柿経自体の記述や形態等の検討、そしてその出土した遺跡での検出状況や共伴遺物から考えられる年代観等を重ね合わせた上ではじめてその具体像に近づける。今回は全国的な柿経の出土例についてはあまり触れられなかったが、鎌倉で確認された事例が全国的な事例も考え合わせるとどういった意味を持つのか、奥深くそして根が深い問題が山積みである。今回はまずはその一歩として柿経に記された番付に着目した。さらに鎌倉で出土の仏法寺跡の柿経について取り上げた。特に仏法寺跡出土の柿経については、層位ごとの検出がなされており、保存処理も終えて

これから経文の内容等について詳細な分析により建長寺などとの比較や相違ごとの特徴についての検討が必要と思われ、中世鎌倉における柿経の在り方についてその研究の可能性が期待できるものと考えている。

本稿作成にあたっては福田誠氏をはじめ井上美百合氏・斎藤早希子氏・田所千英氏・小林未央氏・古谷修氏に協力・指導を賜った。末筆ながら記して感謝の意を申し上げたい。

註 1. 大本山建長寺 1977『巨福山建長寺』

註 2. 平凡社 1995『中国の陶磁 日本出土の中国陶磁⑫』

註 3. 木村美代治・藤原静香 1996『鎌倉考古』No.37 1996年2月25日号「建長寺境内出土の柿経について」にてその出土整理作業の過程ではあるが、その内容や写経形態についての分析がなされ、その研究の途中経過が示されている。

註 4. 木村美代治・藤原静香 1996『鎌倉考古』No.37

註 5. 註 3 において、番付を観察することで派生する諸問題について指摘がなされている。

註 6. 註 3 前掲 p. 6

註 7. 註 3 前掲

註 8. 分配の方法については註 3 報告では a～c に分けて考察されている。「分配」「分者」を示す例として、資料表記中の「三頭一」「五始一」「六末一」「八ノ頭一」などがそれで、分配の箇所を表すために「頭」「末」「始」などの文字が経典の巻数や把数とともに書き添えられている。

註 9. 福田誠ほか 2003『五合枿遺跡（仏法寺跡）』鎌倉市教育委員会によって報告がなされており、遺跡や検出状況の詳細について参照されたい。木村美代治・藤原静香 1996『鎌倉考古』No.37

註 10. 三村昌史 2003「附編 4 鎌倉市仏法寺跡から出土した柿経の樹種構成」『五合枿遺跡（仏法寺跡）』

註 11. 註 10 と同じ

註 12. 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 2022「富ノ森城跡出土の柿経」『発掘ニュース 139 リーフレット京都 404』

註 13. 「聖順禅尼」とは『鎌倉考古』でも人名ではないかと指摘のある記述であるが、今回の再整理の過程には確認できなかったものである。

#### 引用・参考文献

大沢伸啓 2010 『日本の遺跡 41 権崎寺跡 足利一門を祀る下野の中世寺院』同成社

『巨福山建長寺』1977 大本山建長寺

平凡社 1995『日本出土の中国陶磁⑫』「天目茶碗・黒釉瓶」

木村美代治・藤原静香 1996『鎌倉考古』No.37

福田誠ほか 2003『五合枿遺跡（仏法寺跡）』鎌倉市教育委員会

三村昌史「附編 4 鎌倉市仏法寺跡から出土した柿経の樹種構成」『五合枿遺跡（仏法寺跡）』鎌倉市教育委員会

京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 2022「富ノ森城跡出土の柿経」『発掘ニュース 139 リーフレット京都 404』



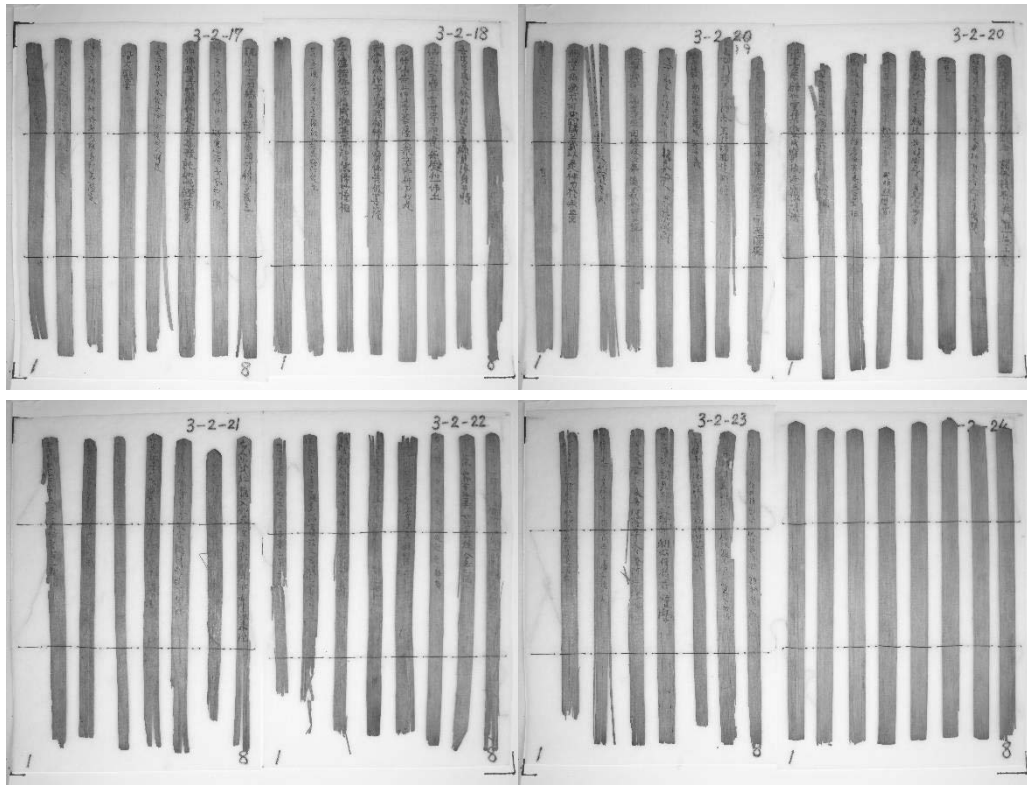


写真1. 再整理後の建長寺出土の柿経

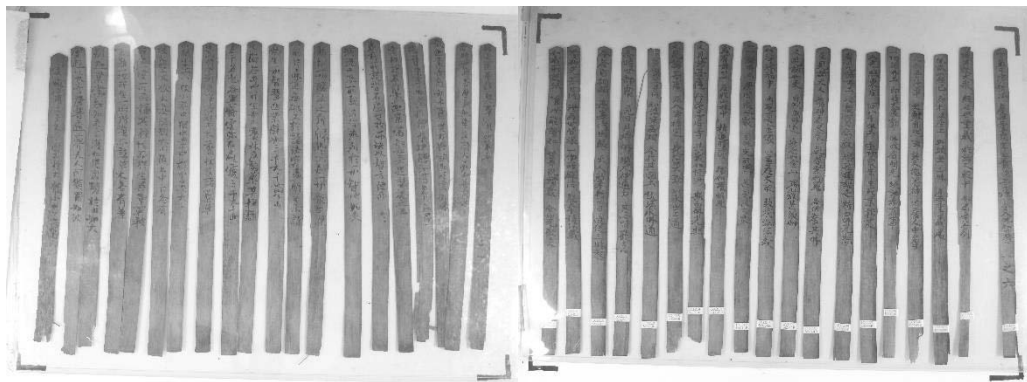


写真2 建長寺出土『妙法蓮華経信解品第四』（左上）  
『薬草喻品第五』（右上）と共伴の黒釉壺と天目茶碗（下）



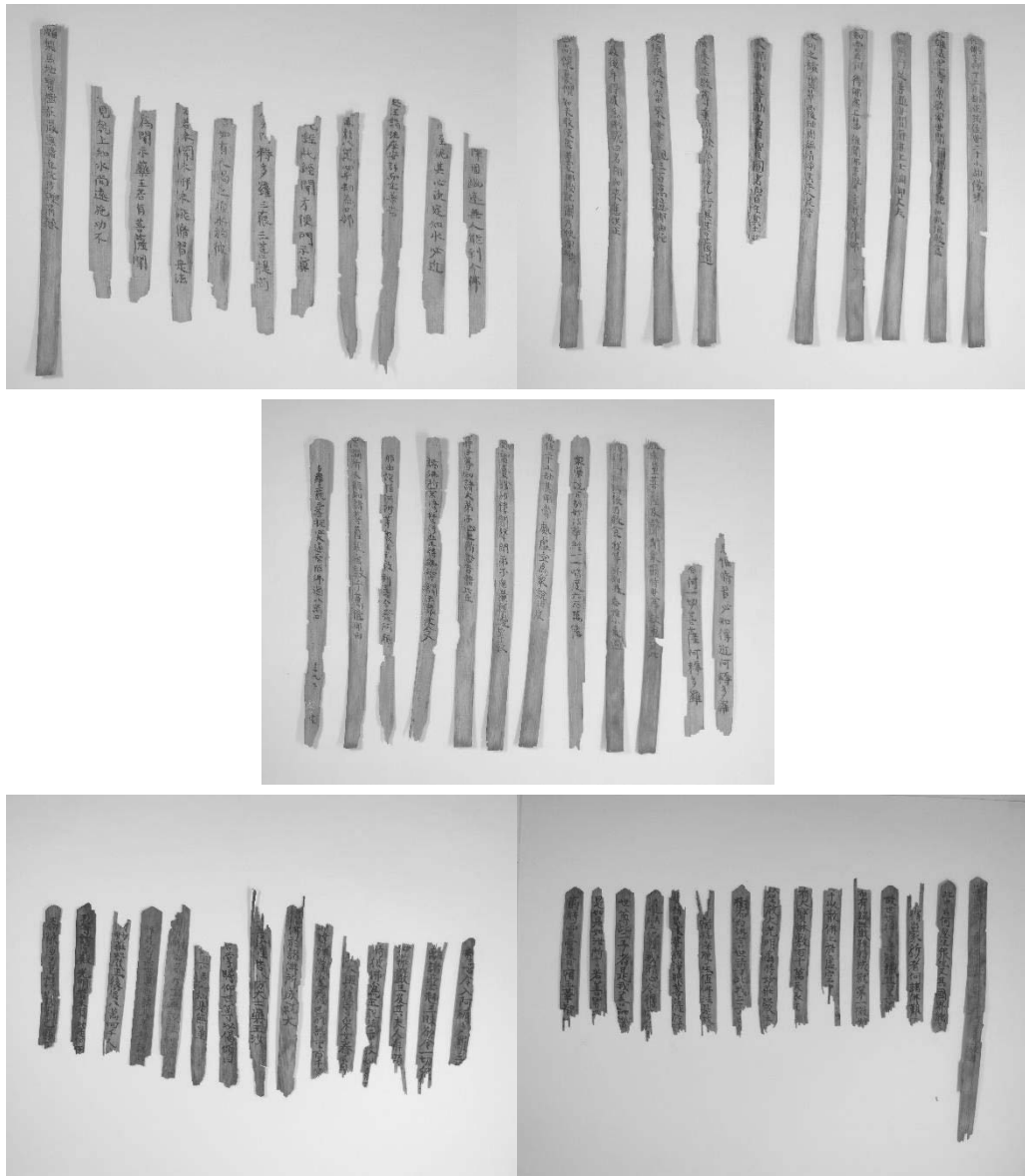


写真3 仏法寺池中層(上・中段)・下層出土柿經(下段)

3行 2行 1行 103行 102行 101行 100行 99行 98行 97行 96行 95行 94行 93行 92行

妙法蓮華經妙莊嚴王本事品第二十七  
 爾時普賢菩薩以自在神通力威德名聞與  
 大菩薩無量無邊不可稱數從東方來所經  
 妙法蓮華經普賢菩薩勸發品第二十八  
 諸法中得法眼淨  
 嚴王本事品時八萬四千人遠塵離垢於  
 者一切世間諸天人亦心拜佛說是妙  
 可思議諸善功德若有人識是一菩薩名字  
 於無量百千萬億諸佛所殖眾德本成就不  
 是是葉王葉上菩薩成就如此諸大功德已  
 於彼中生其二子者今葉王菩薩葉上菩薩  
 莊嚴相菩薩是哀愍妙莊嚴王及諸眷屬故  
 乎今華德菩薩是其淨德夫人今仏前光照  
 而出仏告大衆於意云何妙莊嚴王豈異人  
 生邪見憍慢願志諸惡之心說是語已礼仏  
 所行安穩快善我從今日不復自隨心行不

妙法蓮華經妙莊嚴王本事品第二十七

図1. 仏法寺池中層出土柿經に書写された『妙法蓮華經妙莊嚴王本事品第二十七』  
 (福田ほか 2003 より)

	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	3	3	3	3	3	2	3	3	2	2	1	箱 番号
	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	4	4	4	4	2	4	2	2	4	4	4	
	22	21	14	8	20	23	23	19	17	15	24	18	17	11	14	24	12	12	24	16	21	シート 番号
	7	7	7	7	5	7	2	5	2	8	1	6	1	1	8	8	2	1	1		2	
	表	表	表	表	裏	表	表	表	裏	表	表	裏	裏	表	表	裏	表	表	表	表	裏	表裏
九十二 〇末七	妙法蓮華經卷第一	妙法蓮華經普賢菩薩勸品第二十八	四之十二	妙法蓮華經分別功德品第十七	第十一之一十一	五之六十三	三之四十一	二之六	六二	八〇十一	妙法蓮華經分別功德品第十七	妙法蓮華經第八	八之九	六之四	四之七	八之三	一之十一	二之七	〇〇居士	木曾?	妙法蓮華經法師品第十	文言

5	5	5	5	5	5	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
3	2	2	2	1	1	4	4	4	4	4	4	4	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3
3	7	5	3	11	11	21	15	14	11	10	8	7	24	22	22	22	16	10	4	1		
2	7	6	4	7	3	2	3	1	6	7	5	4	7	8	6	2	2	2	6	3		
表	裏	表	表	表	表	裏	表	表	表	表	表	表	表	表	表	表	表	表	裏	裏		
八之九十八	八之末一	六之末九	妙法蓮華經普賢菩薩勸品第二十八	妙法蓮華經分別功德品第十七	妙法蓮華經從地涌出品第十五	三四十	六末一	八十九 四末四	之一	妙法蓮華經常不輕菩薩品第二十七	七八	七?〇〇	三三七	八之六	六七十一	二	五之六十六	六之七十六	五之五十七	八之始九十三	六ノ八	

6	6	6	6	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	
3	3	2	2	3	4	4	4	4	4	3	3	3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	
15	14	14	18	10	23	19	18	14	14	25	13	7	5	25	25	23	22	21	20	17	16	14
8	4	1	2	2	7	6	4	5	2	6	1	3	3	8	4	3	7	7	6	1	6	7
裏	裏	表	表	表	表	表	裏	表	表	裏	裏	表	表	表	表	裏	表	表	表	表	表	表
一之十三	〇之四十五	三	五之六十四	七之八十七	二八	二十五	八之五	一六	一ノ？	八之二 〇〇〇〇第二十五	妙法蓮華經 如來神力品第二十一	八之三	〇四十八	第二二十五	第二二十七	六之十	〇〇三	八十	妙法蓮華經 譬喻品第三 二之一	妙法蓮華經 藥草喻品第五	三ノ之十一	百九

7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	4	2	2	2	2	2	4	3	3	3	3
12	19	25	25	25	21	21	19	17	15	9	6	12	4	4	7	7	8	9	24	19	18	16
5	5	8	7		6	5	2	3	7	7	4	6	7	3	1	2	5	6	8	5	2	8
表	裏	裏	表	表	表	表	裏	裏	表	裏	表	裏	裏	表	表	表	裏	裏	裏	表	表	裏
四六	二十一	六之七	六〇〇（欠損）	妙法蓮華經 從地涌出品第十五	第七之七	第四之九	第二之二〇	二之〇（欠損）	十六之〇二	妙法華經 寶塔品第十一	百第八百〇〇	三之十二	〇〇〇品第二十六	八之八	六之三	六之二	八之二	八之四	十一〇	五之四	五十六	五九

9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	8	8	7	7	7	7	7	7	7	7
4	4	4	3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	3	2	4	3	3	3	3	3	3	2
5	3	3	5	4	25	22	18	13	7	5	3	1	24	6	11	21	17	5	5	5	3	17
4	5	4	4	4	5	4	3	4	3	6	1	1	8	8	6	6	7	8	3	2	4	5
裏	表	表	裏	表	表	表	裏	裏	裏	表	裏	裏	表	表	表	表	表	裏	表	表	裏	
妙法蓮華經卷第七	藥草喻品第五卷	卷第三	五六	五七	八之一(?)	七二	五十	〇五十一	三十	七	一之十二	一之八八	七之七	六	妙法蓮華經見寶塔品第十一	〇〇〇〇品第十七	二〇三	六之二?三?	第二之〇	七之十一	〇〇卷第五	八之〇

12	12	12	12	12	12	12	12	12	11	11	11	11	11	11	11	11	11	10	9	9	9	9
4	4	4	4	4	4	2	2	1	3	3	3	3	3	3	2	2	1	1	4	4	4	4
18	14	13	8	22	20	16	1	22	23	20	15	12	10	2	16	15	19	21	20	12	11	8
7	2	2	7	2	3	5	7	7	8	4	8	1	5	2	5	6	4	1	8	6	2	3
表	裏	裏	表	表	裏	裏	表	表	裏	裏	表	表	裏	裏	裏	表	表	表	裏	裏	表	表
一七	四一	〇奴〇室三	四ノ四五	口軍已番得阿 三三七	〇徳理〇者 一八	無量義經說法品第二	妙法蓮華經卷第三	十二	育〇光導師	四之六	一三八九	四之三	一之八?	六三七十四	妙法蓮華經卷第二	妙法蓮華經〇〇品第六	二之二	妙法蓮華經卷第八	〽?百六	四之四十六	妙法蓮華經卷第六〇〇書寫三〇〇	七之四

13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13
4	4	3	3	3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	1	1	1
8	6	22	14	15	18	25	25	24	22	21	18	15	7	18	18	18	1	2	6	19	15	15
1	3	3	3	7	3	3	1~2	1		1~5	6	3	4	8	1~5	4	8	1	2	2	6	5
表	表	表	表	表	表	裏	表	表	表裏	表	表	表	表	表	表	裏	表	裏	裏	表	裏	裏
一之〇	一之十三	〇三	〇〇六 七十三	〇〇經 〇〇第十三	妙法蓮華經 属累品第二十二	六之七十七	青色付着物 あり	青色付着物 あり	青色付着物 あり	青色付着物 あり。	陀羅尼品 第二十六	妙法蓮華經 卷第五	一十二	二十	群青色濃紺 色の付着物	經卷第〇	一之六	六之七十二	四十二	六七	八十七 七〇〇	八十七 七〇〇

14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	13	13	13	13	13
3	3	3	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4	4	4	4	4
6	1	4~10	19	2~	24	22	21	19	19	19	18~	11	10	2	3	6	3	13~	13~	18	16	14	
5	中層袋	中層袋	8	中層袋	2	2	3	7	2	2	中層袋	6	5		3	6	1~5	中層袋	中層袋	1	1	8	
表	表	表	表	表	裏	裏	表	表	裏	表	裏	裏	表	裏	裏	表	表裏	表	表	裏	裏	表	
妙法蓮華經 卷第二	七之八十八	五百弟子受 記品第八	五？八？	為？初？	二末？之 一	三	七之八十六	七之八九	一一二	妙法蓮華 卷經第一	六十	三十二	三十二	二之四	六	一十二	青色の付 着物	七十三	二	二	〇〇百十	四十三	

15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	14	14	14	14	14
3	3	3	3	3	4	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4	4	4	3
14	13	10	8	4	5~ 6 中層 袋	6~ 10 中層 袋	21	20	1	25	24	24	23	23	21	10	4	9	24	9	3	6
1	3	1		3			3	7	1	5	6	1	3	1	2		4	3	3	2	5	6
表	裏	表	裏	裏			裏	表	表	裏	裏	表	裏	裏	表	表	表	裏	表	裏	表	表
一 二	六	三〇 一	二 〇	六 之 七 九 九	一 之 八	六 ?	六 ノ 九 九	六 之 七 八	無 量 義 經 德 行 品 第 一	妙 法 蓮 華 經 見 寶 塔 品 第 十 一	十 〇 〇	二 〇	二 之 七 〇	百 七	百 六	〇 〇 品 〇 一	八 二 ?	妙 法 蓮 華 經 化 城 喻 品 第 七	一 之 七	百 十 七	四 之 十 二	妙 法 蓮 華 經 藥 草 喻 品 第 五 三

1	21	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	15	15	15	15	15	
	1	2	2	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4	4	4	4	3	
3	8	21	18	9	23	23	2	25	20	20	13	10	7	3	2	1	23	7	6	5	18	
5	6	8	2	1	6	1	4	4	3	2	1	8	4	8	7	5	4	3	4	3	6	
裏	裏	裏	表	表	表	表	裏	表	表	裏	表	裏	裏	表	表	裏	裏	表	裏	表	裏	
十	六 之 七	〇 十	〇 〇 九 十 三	普 之 〇 百 二 十 一	第 二 十 五	觀 音 經 妙 法 蓮 華 經 觀 世 音 菩 薩 普 門 品	五 十 三	七 ノ 九 十 一 〇	二	七 十	六 之 〇 十 一	ノ 師 子 演 說 經 典 從 妙 第 一 ?	三 十 三	〇 〇	五 之 六 十 三	妙 法 蓮 華 經 卷 第 二	三 之 二 十 一	三 之 末 二	五 之 五 十 七	第 二 十 三 三 之 三 十 三	二 之 二 十 二 第 〇 七 十 〇	〇 〇 之 十 五

43	43	42	42	42	42	42	42	42	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41
2	2	3	2	2	2	1	1	1	4	4	4	4	4	3	3	3	3	3	2	2	1	1
16	16	5	25	6	17	18	8	4	25	17	17	11	1	17	17	17	15	13	15	13	22	13
7	8		7	6	6	7	8	7		7	6	2		6	5	3	8	5	7	8	5	4
表	表	表	表	表	表	表	表	裏	表	表	表	裏	表	表	表	表	表	表	表	裏	表	表
〇之六十五	心阿弥〇〇〇	〇〇〇	二?十	八十三	二五	九之七	六之九	四十五	三之五	法華經第三	法華經五百弟子受記品第八	三?五?	第七之十	〇〇三	〇〇二	二之七	〇六〇〇	八之十〇	三十二	九一之?	妙法蓮華經第四?	第六之七

																					43	43	43	43	43	43				
																						2	2	2	2	2	2			
14	9	作4	未作	中層袋	4	し	番	番	番	番	番	番	番	番	番	番	番	番	番	番	し	7	中層/袋	1	16	16	16	16	16	16
枚	目	目	目	75	83	な	1	な	1	な	9	な	9	な	8	な	6	な	6	な	4	な	7	3	1	2	3	4	5	6
				表	裏	表	表	表	表	表	表	表	裏	裏									表	表	表	表	表	表	表	
〇〇法師〇第一	一之十二	〇佛〇後第〇八十三	〇〇〇三十二	八之三	六之七十	〇〇〇〇〇	〇品第五	二之	第六之〇	二之七	妙法蓮華經〇〇	妙法蓮華經化城喻品	七	一〇	三之一	ほほ数字記入あり。	〇〇七	二之〇	二之五	一之七	〇之八	一〇九								

1	41	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21
.	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	1	1	1	1	1
0	5	23	21	21	21	21	15	15	10	6	6	5	3	3	4	4	2	20	20	13	11	13
3	6	3	1	6	8	5	2	1	5	7	2	5	3	1~7	7	1	7	8	7	1	7	1
表	表	裏	裏	表	表	表	表	表	表	表	表	裏	裏	裏	表	表	表	表	表	表	表	表
六四	三之五	妙法蓮華經普賢菩薩勸發品第二十八	〇九〇十〇十一〇	〇五〇六〇七〇八	〇一〇二〇三〇四	妙法蓮華經提婆達多品第十二三一	妙法蓮華經卷第一	妙法蓮華經序品第一	妙法蓮華經卷第八	六之六十八	妙法蓮華經陀羅尼品第二十六	二末	守護文即乞咒日	〇一〇二〇三〇四一〇三十五	〇四十一〇四十二	〇三十六・三十七	五十二	七	八	二十三	〇〇行品第一	〇師子演說經典從妙第一

表1. 建長寺出土柿經にみえる「番付」一覧

- ※1 柿經の經文の中央や末尾などに經典の内容とは異なる「番付」と見られる数字や文字などを中心に抽出した。
- ※2 抽出したのは經典名・經典卷数・人名と思われる記載など。
- ※3 方法は柿經の形を崩さないように入れた箱番号・シート番号ごとに表裏面・内容などを記載。
- ※4 中層袋・下層袋としたものは遺存状態が悪く、表裏も判別がつかない小片も含まれるため、十分な抽出はできていない。
- ※5 おぼろげながらも確認できるものは明記したが、不明瞭なものは?とした。

本稿作成にあたって大本山建長寺様より、資料の掲載の許可等の寛大なるご配慮をいただいたことに、感謝を申し上げたい。